

1 在籍学級での外国人児童生徒等の受入れ

(1) 学級担任として必要な視点

学級担任として、外国人児童生徒等を学級に受け入れる際、「言葉が通じるだろうか」、「学級になじめるだろうか」などの心配から、「大変だ」、「面倒だ」などとマイナスに捉えてしまう場合も少なくないようです。しかし、外国人児童生徒等を学級に受け入れることは、在籍学級の児童生徒にとっても多様な価値観や文化を知り、成長できる大きなチャンスであり、学級を豊かにしてくれるプラスの出来事だということを理解しておきましょう。

学級担任として、以下の2つの視点を持つことが必要です。

① 広い視野を持つこと

グローバル化が進展する中、世界中で多くの人々が国境を越えて移動しており、日本の児童生徒を含め、子供たちはすべていずれの国においても、地域や学校にしっかりと受け入れられることが重要です。これは、世界の動向をしっかりと把握し、国籍にかかわらずすべての児童生徒を大切にすることを重視する視点です。

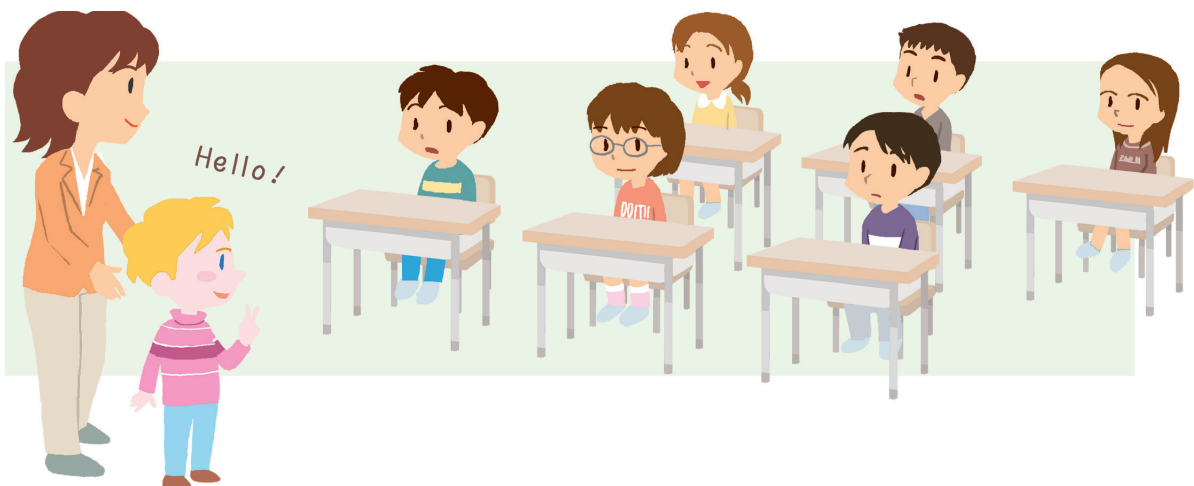
② 個に応じた視点

異文化の中で育っていく児童生徒は、言葉の問題や異文化間での価値観、習慣の違いなどについて、一人一人が課題を抱えているため、きめ細やかなケアが必要です。これは、個に応じた指導が必要であるという視点です。

外国人児童生徒等の受入れに際しては、これらの両方の視点をもって、児童生徒に向き合い、教師自ら、受容的な姿勢を示すことが大切です。

(2) 外国人児童生徒等の受入れの流れ

在籍学級の児童生徒にとって、その国籍にかかわらず、学級に新しい仲間が増えることは、大きな喜びですが、「どんな子かな」、「仲良くなれるかな」など多少の不安を抱えているものです。しかし、編入してくる児童生徒やその家族の不安はそれよりも大きいものです。学級担任の温かな姿勢としっかりと配慮した受入れ体制づくりが求められます。外国人児童生徒等の受入れについては、日本人児童生徒の受入れと共通な面もありますが、異文化ゆえの配慮も、適宜必要な面があることを留意しておきましょう。そのために、先に示した2つの視点を生かしながら、受入れの全体の流れを理解し、その段階にあった細やかな指導を行いたいものです。



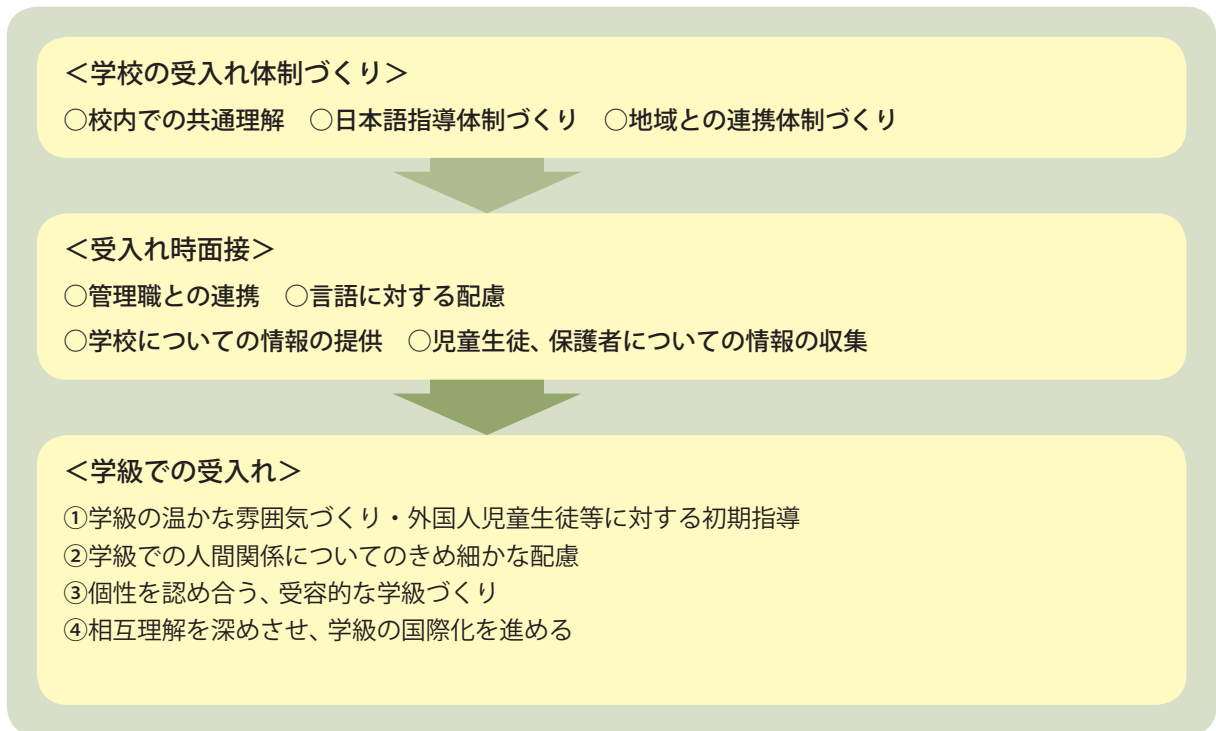


図4：外国人児童生徒等の受入れの流れ

<事例1：学級での初対面での配慮>

学級担任をしていると、外国からの編入ではなくとも、引っ越し等による転入の児童生徒を受け入れた経験はほとんどの先生がお持ちだと思います。その場合、学級担任は、まずその児童(生徒)を教室に連れて行き、次のような自己紹介をさせることが多いのではないのでしょうか。「ぼくは、〇〇市の小学校から来ました△△△△です。よろしくおねがいします。」日本人の児童生徒であれば何の問題もない、自然な指導だと言えます。しかし、外国から来たばかりで、日本語がほとんどできない児童生徒にとっては、この挨拶の言葉ですら大変なプレッシャーとなります。学級担任がよかれと思って行う指導も、外国人児童生徒等に対しては、異なる方法が必要な時もあると言えます。

2 外国人児童生徒等の受入れ体制づくりと必要な指導

(1) 学校の受入れ体制づくり

外国人児童生徒等の受入れでは、言葉の問題がでてきます。来日したばかりの子供が、まず初めに直面する問題は、日本語が分からない、ということです。ここでまず留意すべき点は国語の指導と日本語指導は大きく異なるということです。また、学級担任にとって受容的な学級の雰囲気づくりをすることが大きな役割になります。

日本語指導については、学級担任だけで行うのではなく、様々な連携をとった方がより適切な指導を行うことができます。そこで、前もって、管理職や日本語指導担当教師などと連携し、日本語指導や学級の情報伝達の体制づくりを行うことが重要です。管理職や日本語指導担当教師など相談しながら、「特別の教育課程」の編成・実施の判断も含め、以下のような体制づくりを心がけましょう。

① 学校全体での共通理解と協力的体制づくり

- ・管理職、日本語指導担当教師との連携、他の教師との情報交換、校内研修など

②地域での連携体制づくり

- ・教育委員会の担当者、地域のNPO・ボランティア団体等とのつながり
- ・地域人材の活用、教育委員会派遣などによる外部人材(日本語指導の支援者、学習支援ボランティア、通訳など)の確保

特に、小学校の場合、担任の学級に対する影響力は大きく、一人で様々な課題を抱え込んでしまう場合もありますが、外部とのつながりを広めていこうとする姿勢が重要になります。

(2)外国人児童生徒等への必要な指導

①受入れ当初の面接と指導

学級担任が初めて外国人児童生徒等に出会う場面としては、例えば、校長室などで、面接を行い、児童生徒とその保護者に学校生活について説明するときなどが想定されます。この場面で、どのようなことを説明したらよいか、まず、内容をしっかりと整理してから臨むことが大切です。面接に臨む学校側の体制や面接の内容などについては、管理職や日本語指導担当教師などと相談の上、確認しておくべきです。また、日本語の理解の程度も事前に把握して臨みたいところです。そのために、以下の点をおさえておくことが必要でしょう。

○通訳者に同席してもらうなど、言語に対する配慮を行う。

外国人児童生徒等もその保護者も全く日本語が話せない場合も多々あります。

もし通訳者が同席できない場合は、当該言語の対訳集を用意したり、翻訳アプリを活用したり、校内の写真や学校で使う言葉の単語カードなどを準備したりしておくともよいでしょう。

○児童生徒のプロフィールや家庭環境等を記載した個票を作成する。

「特別の教育課程」による日本語指導を実施する場合はもちろんですが、実施しない場合でも、在籍学級担任として、児童生徒一人一人のプロフィールや家庭環境等を記載した個票の書式(項目)を決めて、作成するようにしておくともよいでしょう。学級によって情報量の違いが出ないように、記載項目としては、「個別の指導計画」とも関連させて、次のような内容を共通に設定しておくともよいでしょう。

- | | | | | |
|-----------|-------------|-------|-------------|-------|
| ●本名と呼称 | ●性別 | ●生年月日 | ●来日年月日 | ●現住所 |
| ●緊急連絡先 | ●家族構成 | ●国籍 | ●家庭内使用言語 | ●滞在期間 |
| ●滞在予定 | ●日本語学習歴 | | ●出身国での学習 | |
| ●好きな教科 | ●得意なこと・趣味 | | ●将来の希望・進路 | |
| ●病歴やアレルギー | ●発達障害の診断の有無 | | ●宗教上の配慮事項など | |

○学校生活上の最低限必要な情報を明確に具体的に伝える。

最低限必要な情報ははっきりと伝えるために、アルファベットなど保護者が読める表記にしたり、実物を示したりして工夫しましょう。また、持ち物など一度に全てそろえることが難しい場合もありますので、当面は代替品でもよいことも伝えます。

子供と保護者に伝えること
学年・学級、学級担任の名前 当面必要な持ち物(上靴、筆記用具、給食セット、体操服など) 学校生活の一日の流れ(登校時刻、下校時刻、時程など) 学校の施設の使い方(靴箱、トイレ、教室、保健室、職員室などを案内する)など
保護者に伝えること・確認すること
学校の電話番号、遅刻・欠席をするときの連絡の仕方 緊急連絡先(保護者、日本語が通じる知人、会社などの電話番号) 学校で必要となる費用(学校徴収金、給食費、PTA会費など)と納入方法 主な学校行事(遠足、授業参観・保護者会、休日に開催される運動会など)

○日本滞在の理由、予定など基本的な情報を確認し指導に役立てる。

- ・来日の理由、日本での生活経験、今後の滞在予定などを聞いておく。特に、一時的な滞在で数年後に帰国予定なのか、定住する予定なのかで、当該児童生徒に対する指導の内容や目標の設定の仕方にも配慮が必要である。中学生の場合、高校受験、就職など進路を意識した目標設定が必要になる。

<事例2：名前に対する配慮>

受入れ当初に、特に配慮しなければならないことの一つに、外国人児童生徒等の名前についての認識があります。

日本人の名前は、「姓」と「名」の2つで構成されているため、学校ばかりでなく、様々な場面で活用される書類などについて、基本的に2つの枠にそれぞれ「姓」と「名」を記入することになります。しかし、世界には様々な名前が存在し、必ずしも2つの枠に収まるとは限りません。名前は、個人のアイデンティティの根源です。本名をしっかりと確認し、書類等に記入する(してもらう)ことが重要です。

また、学校や役所などで、例えば南米出身の方が記入したアルファベット表記の名前を見て、教師や係が、英語的な発音(例：パウロ→ポール等)で登録してしまうこともあるようです。日本人が外国人を受け入れる場面で、相手の文化を尊重し、柔軟に受け入れる配慮がないと、気づかぬうちに名前すら変えてしまうことがあるのです。来日当初は、当人は、このようなことが起きていることにすらなかなか気づかなかつたり、気づいても言い出せなかつたりします。しかし、後になって問題となることも多いのです。このような名前に関する配慮は、学級担任としても常に意識をしておきたいものです。

②学級での初期指導

外国人児童生徒等と在籍学級の児童生徒たちが初めて出会う場面では、子供たちはお互いに相当に緊張しています。この場面で、在籍学級に温かな雰囲気があれば、外国人児童生徒等はとても安心し、これからの学校生活に期待感を持つことができます。転入生に自己紹介をさせることが多いと思いますが、特にその子にとって初めての来日である場合、担任から紹介してあげる、若しくは、学級に入る前に、簡単な自己紹介の言い方をしっかり教え、練習させておく、などの配慮が必要です。

その他、受入れ当初の学級での留意事項を以下に示します。

- ・当該児童生徒の母語と日本語、両方の挨拶で迎えるとよい。その児童生徒の母語を学級の児童生徒が使うことによって、好意的な受入れのメッセージはより強く伝わる。
- ・座席は、担任の近くとし、いつでも配慮できるようにしておく。
- ・靴箱やトイレなどの場所や使用方法などの最低限必要な事柄は、学級場面で再度具体的に指導する。
- ・休み時間など学校生活のケアをしてくれるよう児童生徒にお願いしておくのは望ましいが、特定の児童生徒に固定化しない方がよい。

- ・個別に話す場面では、ゆっくりはっきりした口調で分かりやすい日本語で語りかける。
- ・長所を見つけ、学級の前でほめるよう意識し、自己肯定感をもたせる。
- ・学校行事や健康診断などのときは、個別に内容や方法を伝える。保護者に対するお知らせは、できるだけルビ振りをしたり、通訳の方に訳してもらったりする。
- ・学習の進度を常に確認し、取り出し指導の日程や内容などについて、日本語指導の支援者などと十分に話し合い、調整しておく。

③児童生徒の適応状況(時期)にあった指導

外国人児童生徒等は、学級への慣れや日本語の習得状況によって、級友との人間関係や、授業態度などにも変化が見られます。さらに、その外国人児童生徒等を受け入れる学級の児童生徒も、月日が経つにつれ、当該児童生徒に対する意識・態度も変わってくるものです。このようなことを学級担任が認識しているかどうか、その時期にあった指導をできているかどうか、当該児童生徒にも、学級にも大きな影響を与えることになります。

以下に日本に来たばかりの児童生徒の一般的な適応状況(時期)とそれぞれに応じた配慮事項を記述します。

1) 自己表現が難しく、不安と期待が入り混じっている時期

この時期には、情緒的・身体的に不安定な面もあるため、学校生活・家庭生活のことなど、保護者としっかり話し合い、相互理解を深めるとともに、信頼関係を築きましょう。

学級での注目度は高く、多くの児童生徒から好奇の目で見られたり、面倒を見てもらったり、話しかけられたりします。このような学級の児童生徒からの働きかけに対し、日本語が分からないために、あまりかかわろうとしない児童生徒もいれば、日本語が分からなくても、言葉を教えてもらったり、一緒に遊んだりして学級に溶け込んでいく児童生徒もいます。

学級担任としては、学級の様子を観察し、適宜、当該児童生徒に声かけをすること、また、学級に対しても、ゆっくり丁寧に話しかけること、常に笑顔で対応してあげることなど、配慮の仕方について指導を行うことが大切です。

2) 学級での居場所を見つけようとする時期

この時期には、授業の内容にはついていけないまでも、級友との日常会話については支障なくできるようになり、休み時間などに、級友と一緒に行動ができるようになります。在籍学級の児童生徒は当該児童生徒と行動を共にする中で、「今度の子はサッカーがうまいな」、「明るくておもしろいな」、「絵が上手だな」など、当該児童生徒の特性に気づき、学級集団の中に位置付けていきます。

学級担任は、当該児童生徒の個性(母国の学校生活、学習履歴、趣味、特技、性格、態度、家庭での役割や様子など)を、普段の様子を観察、本人や保護者との面談、学級の他の児童生徒からの話などから、しっかりと把握しておくことが大切です。そして、その個性に合わせ、学級での活動や遊びの場面に誘導してあげたり、友人関係の形成を支援してあげたりすることも必要です。特に、日本語の力をあまり必要としないスポーツの場面などで活躍できる活発な児童生徒の場合、学級集団に溶け込みやすいのですが、比較のおとなしい内気な児童生徒の場合は、友人関係の形成が自分だけでは難しく、孤立してしまう場合もあります。学級担任がその児童生徒の個性を幅広く認め、学級での居場所をつくってあげましょう。言葉が通じるようになった、と安心するのではなく、学級での人間関係へのきめ細かな配慮が必要です。

3) 学級としての調和が求められ、とまどうときもある時期

この時期には、外国人児童生徒等も、授業などの活動場面においても、ある程度言葉が理解できるようになり、一人一人の個性や母文化での違いもありますが、自分からも積極的に発言したり、発表したりするようになります。

しかし、場合によっては、その積極性が、日本人児童生徒からは異質に感じられ、言葉の、もしくは無言の圧力をかけられたり、同調することを求められたりすることもあります。また、自分の行った行動について、教師から、「～してはいけない」と注意され、とまどってしまうこともあります。これらのケースの多くは、その児童生徒の持つ母文化と日本の文化の違いに起因しており、なぜ、友人から煙たがられるのか、教師から注意を受けるのか分からないことが多いのです。学級担任としては、級友とのトラブルについては、見逃すことなく、その理由を認識し、本人に対しても、他の児童生徒に対しても、異文化をお互いに受け入れる開かれた心が育つよう、丁寧に指導することが必要です。また、学級担任自ら指導するときも、なぜ指導しているのか、どう行動すべきだったのか、などを丁寧に分かるように説明してあげることが重要です。

この時期は、外国人児童生徒等が自分らしく行動を始め、学級の一員として大いに活躍できる時期ですが、学級担任が、広い視野をもって多文化共生の教育などを重視して、多様性の受容など、学級の国際化をしっかり図ることが極めて重要なことだと言えます。

4) 学級みんなで相互理解をしつつ学級の一員として活動できる時期

この時期には、学級の中で人間関係も形成され、外国人児童生徒等も学級の児童生徒もお互いの良さを認め合い、それぞれの良さを生かしつつ、学級が成長できる時期です。外国人児童生徒等が在籍することで、学級の国際化が進み、様々な活動を通してそのことが実感できるはずです。

しかし、場合によっては、外国人児童生徒等がどうしても学級になじまず、孤立してしまう場合もあるかもしれません。そのような場合は、その児童生徒は、学校内外において、同じ国の出身だったり、同じ言語が通じたりする子供たちのいる集団に居場所を求め、なかなか日本の子供たちと一緒に活動できなくなる場合もでてきます。出身国の友達と多くコミュニケーションをとり、帰国に備えているケースなどもあり、こうした例が望ましくないとは、一概には言えません。たとえ、一時的に学級において居場所が見つからなかったとしても、学校全体で国際化への取組が行われている場合、学級を越えた活動の場で、他の学級の児童生徒との交流を図り、受容的な雰囲気味わうことが出来たり、より積極的な活動を行うことができたりすれば、再び学級に居場所を見つけられる場合もあるからです。

<事例3：ある子供(中国出身)のつぶやき>

日本の学校に来た初めの頃は、「遊びに行こう」「友達になろう」とか、みんな誘いに来てくれたけど、その時は、言っていることが分からなかったの。そしたら、私は日本語が分からないんだと思われて、だんだん誘いに来なくなっちゃった。みんながもういやになったとき、私、日本語がだんだん分かってきたんだけど、ひとりぼっちになっちゃった。休み時間は、ひとりで家庭科室にいるの。

3 共生の教育と学級の国際化

(1) 学級の国際化に向けて

外国人児童生徒等を受け入れる学級担任として、特に意識すべきこととして、学級の国際化があります。こ

れは、外国人児童生徒等の受入れ学級としてのメリットを生かした学級経営の一つだと言えます。

既に述べたように、外国人児童生徒等の受入れの際に起こる課題に「言葉の問題」など、文化間を越える移動のため、必然的に発生する問題の他に、学級の雰囲気や人間関係などの環境によって起きてしまう課題があります。

ともすると、学級担任として、「自分は外国人児童生徒等も、日本の児童生徒とまったく同じように扱う」という形式的な平等主義で、必然的に起きる問題に対しても何の配慮もしないようなことも起こりえます。偶然にも、うまく適応できる場合もありますが、極めて危険なやり方だと言わざるをえません。

学級担任としては、日本語指導の体制を整備したり、日本語指導担当者と綿密な連携を図ったり、自身が言語習得に関する基礎的理解を図ったりすることも重要です。

(2) 学級担任に必要な姿勢

学級担任の姿勢は学級の雰囲気にも大きな影響を与えます。この姿勢は、無意識のうちに現れてしまう場合もありますので、担任が、自分自身の振り返りを行うことが重要です。

学級担任が、言葉や習慣の違う児童生徒を、どのような視点で見つめ、対応するかで、その児童生徒の持っている個性やそこから来る行動は、長所にも短所にもみえることがあります。

<事例4：アイコンタクト>

ある小学校では、南米から来た児童が転入してきました。その児童は、日本語が理解できないために、話をするとき、相手の目をしっかりと見つめて、表情やしぐさからも言っていることを読み取ろうと努めていました。この児童の様子について、多くの児童は「話している子を受け入れて、真剣に話を聞いてくれる」とプラスの見方をしていましたが、中には、「にらみ付けられているようでこわい」とマイナスに捉えてしまう児童もいました。



受け入れる側がどのような視点で相手を判断するかが、異文化理解の出発点であり、最も重要な点でもあります。上述のような例では、当然、学級担任としては、マイナスの見方をしてしまっている児童に対し、南米から来た児童の気持ちについて、「あの子は、言葉が分からなくてつらいんだね。それでもみんなと仲良くしたいから、一生懸命に話を聞いて真剣な顔をしていたんだね。」と、説明して誤解を解いてあげることが必要です。児童生徒のマイナスの見方をプラスに変える手助けを教員がタイミング良く行うことが大切なのです。

(3) 共生の視点からの学級づくり

受け入れる側の児童生徒の視点をプラスに変革するためには、児童生徒自身が自己を成長させること(自己概念の拡大)と他者を認める態度を育むこと(受容的な態度の育成)、また、それらによって、学級の雰囲気をお互いの個性を認め合うものに高めていくことが求められます。学級担任として、総合的な学習の時間などを中心に、多文化共生に関する単元を組むなど、共生を軸にした取組を計画的に進めることも必要です。

4 保護者への対応と進路指導

(1) 保護者への対応

当然のことですが、学級では、様々なトラブルが起こるものです。時には、児童生徒の保護者同士の話し合いが必要なケースもあります。特に、外国人の保護者と日本人の保護者とが対立関係になってしまうような場合には、学級担任として特別な配慮も必要になります。異文化間の問題への対応として、日本人保護者同士でのトラブルに対応する場合と異なる留意点もありますので、以下にポイントを示します。

① 状況をしっかりと把握すること

無意識のうちに日本の習慣や社会規範に沿って物事を判断することがあります。即座にどちらが正しいか、などと判断をしないで、その出来事の背景に、お互いの文化や習慣の違いによる誤解があるのかもしれない、と常に慎重に状況把握に努めましょう。外国人には、分かり易い日本語を意識的に使って話を聞き、トラブルの理由やその行動の動機などを確認したり、第三者の見解を聞いたりして、お互いが納得のいく話し合いを心がけましょう。

② コミュニケーションスタイルの違い

自分の感情を言葉でストレートに表現するといったコミュニケーションの違いにも留意したいものです。コミュニケーションスタイルの特質の違いをしっかりと意識して、保護者への対応にあたることも大切です。

外国人保護者の場合、日本語の力が十分でないために、本人が意識するよりも、よりストレートな表現に響いてしまうこともあります。このような場合、「失礼な言い方だ」と、感情的に反応してしまうのではなく、相手の本意を把握するように努めながら、コミュニケーションに努めましょう。しかし、伝えるべきことは、言いにくい内容であっても伝える、という態度も重要です。もちろん、外国人の保護者相手に限りませんが、相手のことを配慮したコミュニケーションも身に付けておきたいものです。

③ 双方に意味のある解決

トラブルをめぐる話し合いで、どちらが勝った、負けたという解決を目指しがちですが、両者の願いや事の背景をしっかりと把握してみると、どちらかが勝った、正しいという問題ではなく、粘り強く話し合えば両者が満足できる解決の方向があるものです。

(2) 進路指導

保護者との面談や進路相談に向けて、以下のようなことを確認しておきましょう。

① 外国人児童生徒等の保護者に対しては、家庭では、子供と母語で多くの会話をするのを勧める。幼い時期に来日した子供は、母語を忘れる傾向があり、成長するにつれ、親とのコミュニケーションが難しくなる場合も多い。保護者に対し、言語習得に関する基本的な情報を与える。

② 多くの保護者は、様々な生活場面で、子供が母語と日本語を使い分けて話している様子を見て、両方の言語力が十分育っている、と認識しがちである。しかし、そのような子供には、どちらの言語においても、学力を形成

していく言語レベルにまでは達していない場合がよく見られる。進学の時を迎えた時になって初めて、保護者が子供の実態を認識し、驚くこともある。

- ③外国人児童生徒等にとって、現在、在籍している学級での学習で使われているレベルの日本語の力を身に付けることが重要であり、このことを保護者にもしっかりと伝えておくべきである。
- ④教育委員会、NPO・ボランティア団体、外国籍の卒業生などのあらゆるネットワークを使って、高校進学や就職など進路に関する情報を収集する。保護者にも、日本の進学や就職について十分に説明する。
- ⑤外国人児童生徒等の保護者が子供に期待する進路とその子供の希望する進路は異なることもある。保護者と本人が十分話し合い、両者にとって、より良い未来を築けるように、学級担任が的確な助言をする。

